

## 論文の内容の要旨

論文題目 尹致昊と朝鮮の近代  
——東アジアにおける知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール

氏 名 柳 忠熙

本稿では、19世紀末から20世紀初めにかけての東アジアの文脈のなかで、朝鮮知識人<sup>ユン・チホ</sup>尹致昊（1865～1945）の思想と実践に関する総合的理解を試み、彼の人生と思想が、当時の東アジアにおけるトランスナショナルな文化・政治的状况によって形成され変容していたことを明らかにした。また、その東アジアのトランスナショナリティという文脈に基づいた〈東アジア／朝鮮の近代〉のダイナミズムに注目し、近代東アジアの知識人エトスの特徴とその変容の様相についての理解を示した。

尹致昊は、1865年、武官<sup>ユン・ウソル</sup>尹雄烈の長男として忠清道牙山で生れる。尹は、開化期において、日本をはじめ中国とアメリカに留学し、その後朝鮮政府の開化派官僚となり、独立協会や大韓自強会などにも参加し、朝鮮の近代化と独立のために尽力した。植民地期においては、105人事件（1912）に関わったとして投獄され出獄した後、南メソジスト派の教育者として朝鮮YMCAや延禧専門学校などに関わりながら、朝鮮人の啓蒙をはかった。だが、日中戦争の前後において日本に対して戦争協力を行った過去を持つ人物である。

本稿では、近代への転換期における東アジアの知識人エトスは、漢学的素養及び儒学的思想に基づいた士大夫層の特性と、自国語リテラシーの素養及び啓蒙思想に基づいた市民層の特性が、連携し拮抗しながら混在するなかで生じるダイナミズムを特徴とすると仮定した。開化期における尹致昊の人生と思想の形成とその変化を、近代東アジアの知識人エトスの変容の様相を示す一例として位置付けた。

尹致昊は、幼いときから科挙及第を目指しており、こうした朝鮮士大夫としての素養を持っていた。だが、尹は、海外経験を通して、キリスト教・自由思想・文明論を受け入れ、彼の人生と思想は、これらが複合的に影響し合うなかで変わっていく。尹致昊の日記には、朝鮮士大夫から啓蒙知識人へと変貌する尹致昊の様相が詳細に記されている。初期には儒学政治思想に基づいた朝鮮の為政者としての観点が見られたが、その後キリスト教徒となった彼が、過去の自分自身の思想と素養を否定していく姿を確認することができる。この過去の自己を否定する尹致昊の眼差しは、朝鮮社会ひいては東洋社会にも適用される。自由思想とキリスト教の信仰を持つ尹は、自身が属する朝鮮社会の啓蒙に専念することとなる。

ところで、過去の自己に対する尹致昊の批判が可能なのは、逆説的にも、批判される過去の自身こそ、今までの自分自身の人生と思想であるという自覚によるものである。英語の習得やキリスト教への入信など、過去の自身を顧みる現在の尹致昊の思想を特徴付けるものは、欧文脈に基づいた事象と概念を、漢文脈で翻訳することで得られたものである。尹の啓蒙の実践においても、朝鮮の人々に通用する形にするためには、過去の自分自身を支えていたエトスに基づいた、こうした文化的翻訳を経ずには実現できないものである。この文化的翻訳の過程で、必然的に、士大夫的エトスと市民的エトスが拮抗し融合されて変容していくダイナミックな現象が起る。こうした尹致昊の一連の変化の様子は、近代東アジア知識人エトスのダイナミズムを想像させるものである。

以上の全体的な分析は、以下の各論の分析によって導かされたものである。本稿は3部7章構成である。

第1部「朝鮮知識人と海外体験」では、第1章から第3章にかけて、尹致昊とともに閔泳煥<sup>ミン・ヨンファン</sup>や金得鍊<sup>キム・ドワンニョン</sup>に注目し、朝鮮知識人の海外体験の文化的意味を問題とした。近代化を推進していた日本をはじめとしてアメリカやヨーロッパの諸国の異文化と近代文物を接した朝鮮知識人の反応、そして異文化経験が彼らに与えた影響とそれによる彼らの思想的変化を検討した。

第1章「尹致昊の海外経験と英語学習」では、尹致昊が英語学習を行なった19世紀末の朝鮮における西洋語学習の環境を視野に入れ、彼にとっての英語学習と海外経験の様相とその意味を検討した。現在と異なる言語状況に置かれていた朝鮮語使用者である尹致昊の英語学習の分析を通じて、当時の朝鮮語と英語との言語間コミュニケーションのプロセスから、近代朝鮮語の形成のトランスナショナリティを明らかにした。

第2章「漢詩文で〈再現〉された西洋」では、ロシア皇帝ニコライ2世戴冠式の祝賀使節団（1896）の旅行記録のうち、漢詩文で書かれた閔泳煥の漢文旅行記『海天秋帆』と漢

詩集『海天春帆小集』、および金得鍊の漢詩集『環璣唵艸』を分析の対象として、彼らが洋行を通じて体験した対象を、どのように漢詩文で〈再現〉したのかについて検討した。関泳煥と金得鍊は、上海・東京・ニューヨーク・ロンドンのような近代的な都市空間を、彼らの書記体系である漢詩文で〈再現〉することの難しさを告白していたが、漢字圏の〈理想郷〉の概念を利用することで、表現の限界を乗り越え、漢詩文のテキストで西洋を〈再現〉したことを示した。

第3章「英文で〈再現〉された西洋」では、尹致昊の英文日記に〈再現〉されている西洋、漢詩文の紀行文や詩集では見られない使節団の様子を考察し、開化期の朝鮮知識人の文化的ダイナミズムを検討した。尹致昊は英文日記で、西洋の近代都市の繁栄を改めて実感し、その光景への驚嘆を繰り返して記している。そして、尹致昊と関泳煥との間の衝突と葛藤も記されている。本章では、ロシアという異郷にいた朝鮮知識人たちの間で起きた、東洋文化と西洋文化の教養の差異による衝突と反目の経験、そして漢詩を通じて互いを理解し合う共同経験が、この英文で書かれた洋行の記録に〈再現〉されていたことを明らかにした。

第2部「尹致昊の政治思想の変容と自由思想」では、第4章と第5章にかけて、開化期における尹致昊の思想の特徴とその変容を問題とした。朝鮮士大夫としての素養を持つ尹致昊が、海外生活のなかで、キリスト教や自由思想や文明論などを受け入れ、啓蒙知識人へ変貌していく過程と、独立協会を通じての啓蒙活動の様相を検討した。そして福沢諭吉の啓蒙思想との比較分析を行い、尹致昊の啓蒙思想のキリスト教的特性を論じた。

第4章「尹致昊の改革と啓蒙の論理」では、尹致昊が有する儒学的政治思想と近代政治思想が、どのように拮抗し変容していたのか、その思想的連続性とダイナミズムに注目し、開化期における尹致昊の政治思想の様相とその特徴を明らかにした。具体的には「政府」「教育」「宗教」という尹の思考軸を議論の糸口として、彼の政府改革論と人民啓蒙論を検討し、尹にとっての主権者に関する意識の変化を、士人的な君権概念から市民的な民権概念への移行の一例として示した。

第5章「尹致昊の啓蒙思想とキリスト教的自由」では、朝鮮開化派知識人の開化思想、とくに尹致昊の初期思想に影響を与えた福沢諭吉の自由観と宗教観との比較を通じて、尹のキリスト教信仰に基づいた自由観を、東アジアの知性史的観点で検討した。本章では、尹致昊の自由観はキリスト教信仰に基づいたと仮定し、尹と福沢の宗教観と自由観を分析することを通じて、その観点の同一性と差異、そして彼らの思考を可能とした政治的想像力を明らかにした。

第3部「朝鮮の近代と啓蒙のエクリチュール」では、第6章から第7章にかけて、東ア

ジア／朝鮮における啓蒙思想の翻訳と自由思想の流通を問題とした。明治期における永峰秀樹の翻訳を視野に入れ、朝鮮における近代討論文化の紹介と流通の様相を示した。そして、崔南善<sup>チェ・ナムソン</sup>の翻訳と思想との比較を通じて、1910年代の植民地朝鮮における自助論の政治的想像力の特徴を示した。

第6章「朝鮮開化期の民会活動と「議会通用規則」」では、尹致昊が西欧の討論入門書 *Pocket Manual of Rules of Order for Deliberative Assemblies* (1876、通称 *Robert's Rules of Order*) を抜粋訳した「議会通用規則」の翻訳様相とこのテキストの流通に関する検討を通じて、尹致昊の翻訳の意図を分析した。とくに永峰秀樹が *Robert's Rules of Order* を底本として訳述した『官民議場必携』(1880) と「議会通用規則」の翻訳様相を視野に入れ、尹致昊の翻訳の論理が「議会通用規則」にどのように反映されているのかを確認した。こうした分析を通じて「議会通用規則」は、討論概論書としての性格だけでなく、民会の組織と運営のための指南書という性格をともに考慮すべきテキストであることを明らかにした。

第7章「自助論の政治的想像力と三・一運動」では、1910年代の尹致昊と崔南善の事例を検討し、植民地という状況において、自助論がどのような政治的想像力として働いたのかを明らかにした。まず1910年代の尹致昊と植民地統治権力の関係性を、暴力性に基いた緊張関係として理解し、被植民者の安全保障の問題として論じた。そして、1918年に『自助論』を訳し、翌1919年に「己未独立宣言書」を起草した崔南善に注目し、彼の自助論的思想が、三・一運動の政治的想像力にどのように関連していたのかを検討した。本章では、1910年代後半におけるこの二人の朝鮮知識人の自助論的思想を比較することを通じて、自助論の現実主義的かつ理想主義的な性質という両面性が植民地朝鮮にどのように作用していたのかを示した。

本稿の以上の研究は、尹致昊を中心として、主に朝鮮／韓国の近代と知識人の問題を取り扱ったものであり、東アジアの近代と知識人に関する長期的で膨大な研究の出発点である。今後この朝鮮の近代と知識人の問題を、中国・日本の近代と知識人の問題に繋げ、近代中国と近代日本における知識人エトスの変容に関する研究に広げていく。